

「古事記を讀む」V

— 日本書紀と比較しつつ（天の石屋戸） —

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀

◎古事記

尔くして速須佐之男命、天照大御神に白さく、「我が心清く明きが故に、我が生める子は、手弱女を得つ。此に因りて言はば、自ら我勝ちぬ」と云ひて、勝ちさびに、天照大御神の営田のあを離ち、其の溝を埋み、亦、其の、大嘗を聞き看す殿に屎まり散しき。故、然為れども、天照大御神は、とがめずして告らさく、「屎の如きは、酔ひて吐き散らすとこそ、我がなせの命、如此為つらめ」と、詔りて直せども、猶其の悪しき態、止まずして転たあり。天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣を織らしめし時に、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入れたる時に、天の服織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。

故是に、天照大御神、見畏み、天の石屋の戸を開きて、刺しこもり坐しき。尔くして、高天原皆暗く、葦原中国悉く闇し。此に因りて常夜往きき。是に、万の神の声は、狭蠅なす満ち、万の妖は、悉く発りき。是を以て、八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子、思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集め、鳴かして、天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人の天津麻羅を求めて、伊斯許理度売命に科せ、鏡を作らしめ、玉祖命に科せ、八尺の勾瓏の五百津の御すまるの珠を作らしめて、天児屋命・布刀玉命を召して、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天のはか木の名を取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百津真賢木を根こじにこじて、上つ枝に八尺の勾瓏の五百津の御すまるの玉を取り著け、中つ枝に八尺の鏡を取り繫け、下つ枝に白丹寸手・青丹寸手を取り垂でて、此の種々の物は、布刀玉命、ふと御幣と取り持ちて、天児屋命、ふと詔戸言禱き白して、天手力男神、戸の掖に隠り立ちて、天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繫けて、天の真析を纏と為て、手草に天の香山の小竹の葉を結ひて、天の石屋の戸にうけを伏せて、踏みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。尔くして、高天原動みて、八百万の神共に咲ひき。

是に、天照大御神、怪しと以為ひ、天の石屋の戸を細く開きて、内に告らししく、「吾が隠り坐すに因りて、天の原自ら闇く、亦、葦原中国も皆闇けむと以為ふに、何の由にか、天宇受売は樂を為、亦、八百万の神は諸咲ふ」とのらしき。尔くして、天宇受売が白して言はく、「汝が命に益して貴き神の坐すが故に、歡喜び咲ひ樂ぶ」と、如此言ふ間に、天児屋命・布刀玉命、其の鏡を指し出だし、天照大御神に示し奉る時に、天照大御神、逾よ奇しと思ひて、稍く戸より出でて、臨み坐す時に、其の隠り立てる天手力男神、其の御手を取り引き出すに、即ち布刀玉命、尻くめ繩を以て其の御後方に控き度して、白して言ひしく、「此より以内に還り入ること得じ」といひき。故、天照大御神の出で坐しし時に、高天原と葦原中国と、自

ら照り明ること得たり。

是に、八百万の神、共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負ほせ、亦、鬚と手足の爪とを切り、祓へしめて、神やらひやらひき。

◎日本書紀

【七の〇】

是の後に、素戔鳴尊の爲行、甚だ無状し。何とならば、天照大神、天狭田・長田を以て御田としたまふ。時に素戔鳴尊、春は重播種子し、且畔毀す。秋は天斑駒を放ちて、田の中に伏す。復天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰に新宮に放屎る。又天照大神の、方に神衣を織りつつ、斎服殿に居しますを見て、則ち天斑駒を剥ぎて、殿の豊を穿ちて投げ納る。是の時に、天照大神、驚動きたまひて、梭を以て身を傷ましむ。此に由りて、発慍りまして、乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉して幽り居しぬ。故、六合の内常闇にして、昼夜の相代も知らず。時に、八十万神、天安河辺に会ひて、其の禱るべき方を計ふ。故、思兼神、深く謀り遠く慮りて、遂に常世の長鳴鳥を聚めて、互に長鳴せしむ。亦手力雄神を以て、磐戸の側に立てて、中臣連の遠祖天兒屋命、忌部の遠祖太玉命、天香山の五百箇の真坂樹を掘じて、上枝には八坂瓊の五百箇の御統を懸け、中枝には八咫鏡一に云はく、真経津鏡といふ。を懸け、下枝には青和幣、白和幣を懸でて、相与に致其祈禱す。又媛女君の遠祖天鈿女命、則ち手に茅纏の稍を持ち、天石窟の前に立たして、巧に作俳優す。亦天香山の真坂樹を以て鬘にし、蘿を以て手纏にして、火処焼き、覆槽置せ。頭神明之憑談す。是の時に、天照大神、聞しめて曰さく、「吾、比石窟に閉り居り。謂ふに、当に豊葦原中国は、必ず為長夜くらむ。云何ぞ天鈿女命如此嘯楽くや」とおもほして、乃ち御手を以て、細に磐戸を開けて窺す。時に手力雄神、則ち天照大神の手を奉承りて、引き奉出る。是に、中臣神・忌部神、則ち端出之縄界す。乃ち請して曰さく、「復な還幸りましそ」とまうす。然して後に、諸の神罪過を素戔鳴尊に帰せて、科するに千座置戸を以てして、遂に促め懲る。髪を抜きて、其の罪を贖はしむるに至る。亦曰はく、其の手足の爪を抜きて贖ふといふ。已にして竟に逐降ひき。

【七の一】

一書に曰はく、是の後に、稚日女尊、斎服殿に坐しまして、神之御服織りたまふ。素戔鳴尊見して、則ち斑駒を逆剥ぎて、殿の内に投げ入る。稚日女尊、乃ち驚きたまひて、機より墮ちて、持たる梭を以て体を傷らしめて、神退りましぬ。故、天照大神、素戔鳴尊に謂りて曰はく、「汝猶黒き心有り。汝と相見じ」とのたまひて、乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉著しつ。是に、天下恒闇にして、復昼夜の殊も無し。故、八十万の神を天高市に会へて問はしむ。時に高皇産霊の息思兼神といふ者有り。思慮の智有り。乃ち思ひて白して曰さく、「彼の神の象を凶し造りて、招禱き奉らむ」とまうす。故、即ち石凝姥を以て治工として、天香山の金を採りて、日矛を作らしむ。又真名鹿の皮を全剥ぎて、天羽鞆に作る。此を用て造り奉る神は、是即ち紀伊国に所坐す日前神なり。

【七の2】

一書に曰はく、日神尊、天垣田を以て御田としたまふ。時に素戔嗚尊、春は渠填め、畔毀す。又、秋の穀已に成りぬるときに、則ち冒すに絡繩を以てす。且日神の織殿に居しらす時に、則ち斑駒を生剥にして、其の殿の内に納る。凡て此の諸の事、尽に是無状し。然れども、日神、恩親しき意にして、愠めたまはず、恨みたまはず。皆平なる心を以て容したまふ。日神の新嘗しめす時に及至びて、素戔嗚尊、則ち新宮の御席の下に、陰に自ら送糞る。日神知しめさずして、徑に席の上に坐たまふ。是に由りて、日神、体挙りて不平みたまふ。故、以て悲恨りまして、廻ち天石窟に居しまして、其の磐戸を閉しぬ。時に、諸の神、憂へて、乃ち鏡作部の遠祖天糠戸者をして、鏡を造らしむ。忌部の遠祖太玉には幣を造らしむ。玉作部の遠祖豊玉には玉を造らしむ。又山雷者をして、五百箇の真坂樹の八十五箇を採らしむ。野槌者をして、五百箇の野薦の八十五箇を採らしむ。凡て此の諸の物、皆来聚集ひぬ。時に中臣の遠祖天兒屋命、則ち以て神祝き祝きき。是に、日神、方に磐戸を開けて出でます。是の時に、鏡を以て其の石窟に入れしかば、戸に触れて小瑕つけり。其の瑕、今に猶存。此即ち伊勢に崇祕る大神なり。已にして罪を素戔嗚尊に科せて、其の祓具を責る。是を以て、手端の吉棄物、足端の凶棄物有り。亦唾を以て白和幣とし、涙を以て青和幣として、此を用て解除へ竟りて、遂に神逐の理を以て逐ふ。

【七の3】

一書に曰はく、是の後に、日神の田、三処有り。号けて天安田・天平田・天邑并田と曰ふ。此皆良き田なり。霖旱に経ふと雖も、損傷はるること無し。其の素戔嗚尊の田、亦三処有り。号けて天櫛田・天川依田・天口銳田と曰ふ。此皆磽地なり。雨れば流れぬ。早れば焦けぬ。故、素戔嗚尊、妬みて姉の田を害る。春は廢渠槽、及び埋溝、毀畔、又重播種子す。秋は捶籤し、馬伏す。凡て此の悪しき事、曾て息む時無し。然れども、日神、愠めたまはずして、恒に平恕を以て相容したまふこと、云云。

日神の、天石窟に閉り居すに至りて、諸の神、中臣連の遠祖興台産靈が児天兒屋命を遣して祈ましむ。是に、天兒屋命、天香山の真坂木を掘して、上枝には、鏡作の遠祖天抜戸が児石凝戸辺が作れる八咫鏡を懸け、中枝には、玉作の遠祖伊奘諾尊の児天明玉が作れる八坂瓊の曲玉を懸け、下枝には、粟国の忌部の遠祖天日鷲が作れる木綿を懸て、乃ち忌部首の遠祖太玉命をして執り取たしめて、広く厚く称辞をへて祈み啓さしむ。時に、日神聞しめして曰はく、「頃者、人多に請すと雖も、未だ若此言の麗美しきは有らず」とのたまふ。乃ち細に磐戸を開けて窺す。是の時に、天手力雄神、磐戸の側に侍ひて、則ち引き開けしかば、日神の光、六合に満みにき。故、諸の神、大きに喜びて、即ち素戔嗚尊に千座置戸の解除を科せて、手の爪を以ては吉爪棄物とし、足の爪を以ては凶爪棄物とす。乃ち天兒屋命をして、其の解除の太諄辞を掌りて宣らしむ。世人、慎みて己が爪を収むるは、此其の縁なり。既にして諸の神、素戔嗚尊を嘖めて曰はく、「汝が所行甚だ無頼し。故、天上に住むべからず。亦葦原中国にも居るべからず。急に底根の国に適ね」といひて、乃ち共に逐降ひ去りき。時に、霖ふる。素戔嗚尊、青草を結束ひて、笠蓑として、宿を衆神に乞ふ。衆神の曰はく、「汝は是躬の行濁悪しくして、逐ひ謫めらるる者なり。如何ぞ宿を我

